

【研究ノート】

農福大連携の“仕掛け”となる
“拠点施設”の役割と特徴の検討

——オランダのホーフ＝ブルック福祉農園における
“温室”の事例をもとに——

寺 林 暁 良
矢 崎 一 彦
栗 山 隆
石 川 悟
岡 田 直 人

研究ノート

農福大連携の“仕掛け”となる“拠点施設”の役割と特徴の検討 ——オランダのホーフ＝ブルック福祉農園における“温室”の事例をもとに——

寺 林 暁 良 矢 崎 一 彦 栗 山 隆
石 川 悟 岡 田 直 人

目次

- I. 研究の目的
- II. 研究の背景
 - 1. 島松エリアでの実践の経緯
 - 2. 近年の福祉政策における連携の重要性
 - 3. 連携の課題と“拠点施設”への注目
- III. 研究の方法
- IV. 調査の結果
 - 1. ホーフ＝ブルック福祉農園の概要
 - 2. ゲストの特性と活動
 - 3. “温室”とその機能
- V. 考察
 - 1. “温室”の社会的役割
 - 2. “温室”の建築的特徴
- VI. 結語

[要旨]

本稿では、北広島市島松エリアでの農福大連携とそれを核とした多様な主体の連携や地域活性化を進める“仕掛け”となる“拠点施設”の導入可能性について検討するため、オランダのホーフ＝ブルック福祉農園での現地調査をもとに、その社会的役割や建築的特徴について考察を行った。

同福祉農園は、障害者や不登校児、認知症高齢者などのセラピー中心のケア施設である。その中核的な施設である“温室”は、農園や農作物の成長過程が身近に観察できる場、収穫された作物や物品などの売店、地域の人々に解放されたテラスカフェとしての機能も有している。

調査の結果、“温室”には、多様な特性を持つゲストを結びつける拠点、ゲストや福祉農園を社会と結びつける拠点、人々と「物」を結びつける拠点としての役割があることがわかった。また、それらを可能にしているのは、“温室”が風景に溶け込むおおらかな空間を生み、順次改善が可能なオープンな建築構造を有するという特徴によることもわかった。

本稿での調査結果をもとに、島松エリアで農福大連携をはじめとする人々の連携を進めるための議論を喚起していく。

I. 研究の目的

本稿の目的は、農業と福祉と大学の連携、すなわち農福大連携を推し進めるため、そしてより多様な主体の連携を促進するために“拠点施設”が果たしうる役割を明らかにすることである。また、その役割を高めるためには“拠点施設”にどのような建築的な特徴が求められるかについても論じる。

筆者のうち岡田、栗山、石川は、札幌近郊エリア、特に余市郡余市町においてストレングス（強み）の活用による地域内外の活発な

交流やそれによる地域経済の活性化の方法について検討し、社会資源のネットワーク構築がその鍵になることを指摘した。また、こうした社会資源のネットワークの構築に有効な手段のひとつになりうるのが農福大連携であることを、学生の関与などを含むアクション・リサーチによって明らかにしてきた（岡田ほか2016；石川ほか2017；石川ほか2018）。

これらの研究に引き続く本研究は、北海道北広島市の島松エリアでのアクション・リサーチを前提とし、これから農福大連携を実践し、さらに多様な主体へと連携を進める

キーワード：農福連携、農福大連携、拠点施設、オランダの福祉農園、北広島市

ための仕掛けとして“拠点施設”がどのような役割を果たしうるのかを検討する。本稿では、その検討の参考としてオランダの財団法人ホーフ＝ブルック福祉農園 (Stichting Zorgboerderij Hoog-Broek) を取り上げ、現地調査で得られた知見を示す。

本稿の構成は以下の通りである。まず第Ⅱ節では、研究の背景として島松エリアにおいて農福大連携を推進することになった経緯や福祉分野で連携推進が求められる政策的背景、“拠点施設”についての検討が必要になった経緯をまとめる。続く第Ⅲ節では、なぜホーフ＝ブルック福祉農園の“拠点施設”に着目するのかを説明し、研究の方法を述べる。第Ⅳ節では、同福祉農園で行った調査の結果を示し、同福祉農園にある“拠点施設”の機能を整理する。第Ⅴ節では、その“拠点施設”について社会的役割と建築的特徴の面から考察する。最後に第Ⅵ節で本稿をまとめるとともに、今後の島松エリアでの実践に向けた展望を述べる。

Ⅱ. 研究の背景

1. 島松エリアでの実践の経緯

筆者らが調査を行っている島松エリアは、1873 (明治6) 年に札幌・函館間をつなぐ札幌本道 (旧国道36号線) の駅通所⁽¹⁾ 設置により拓かれた地域である。現在は新たに開通した国道36号や道央自動車道により、主要な交通路ではなくなり、島松川と仁井別川沿いに丘陵に挟まれるように空間⁽²⁾ が細長く存在している。現在の交通路から外れたことで行政による新たな整備開発はなくなったが、それゆえに時間が止まったように自然の豊かさと明治開拓期の雰囲気が残る空間となった。

札幌圏から自家用車で訪問するには便利な地理的条件があるにもかかわらず、明治開拓期の雰囲気が壊されずに残され、自然豊かな丘陵に囲まれた静かな空間であることは、ま

さに島松エリアのストレングスとなっている。実際、島松エリアにはこうした空間の豊かさを求めて、十数年来“新たな入植者”ともいべきガラス工芸家やレンガ職人、農福連携を行う農業者といった一芸のある移住者が増えつつある⁽³⁾。しかし、現状では地域内外の人の交流は限定的であり、島松エリアが持つストレングスが十分に生かされているとは言いがたい。

こうしたなか、移住者の一人で、すでに農福連携を実践している合同会社竹内農園⁽⁴⁾ の竹内巧氏より、筆者らに対して「島松エリアを“新たな入植者”とともに自然環境と調和しつつも観光客や買い物客が来るような魅力ある地域に育てたい、そのために大学に協力してもらいたい」との声かけがあった。これが本研究で島松エリアにおいて農福大連携の実践を目指すことになったきっかけである。

2. 近年の福祉政策における連携の重要性

本研究は農福大連携をコアにした多様な主体の連携とそれによる地域の多面的な活性化を目指しているが、このことは近年の国内における福祉政策とも合致している。

2016年6月2日閣議決定の「ニッポン一億総活躍プラン」では、「子供・高齢者・障害者など全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に作り、高め合うことができる『地域共生社会』を実現する。このため、支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉など地域の公的サービスと協働して助け合いながら暮らすことができる仕組みを構築する」ことが謳われている。そのことを実現するために、地域住民の参画だけでなく、福祉と地域における他分野 (まちおこし、産業、農林水産、土木、防犯、環境、社会教育、交通、都市計画) とが協働できる体制が求められた。

また、2017年には「地域包括ケアシステムの強化のための介護保険法等の一部を改正する法律（社会福祉法改正）」と「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部により『「地域共生社会」の実現に向けて』が決定され、それまでの社会福祉制度や介護保険制度だけによる地域包括ケアシステムの構築が困難となり、国の施策としても正式に地域住民の参画を求めるようになった。

加えて、2020年3月の「地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律（社会福祉法等改正法）」に基づく「重層的支援体制整備事業」では、農業、観光、まちづくり、環境、地方創生等、多分野協働のプラットフォームの創設を目指すこととなった⁽⁵⁾。

このように、多様な主体の連携や協働という方向性は国の福祉政策のなかでも重視されるようになってきている。このような方向性が本研究と同時進行で明確になったことは、まさに同様の目的意識を持つ本研究にとっても追い風になっている。

3. 連携の課題と“拠点施設”への注目

しかしながら、島松エリアで具体的に農福大連携や多様な主体の連携、それをコアとした地域活性化を進めるためには課題がある。それは、具体的にこのような連携を進めるためにはどうしたらよいのか、ということである。

すでに述べたように、島松エリアは多くのストレングスを有している。また、連携や協働に関しては、国の政策的な後押しもある。しかし、それだけで人々の交流が自動的に活発化するわけではない。多様な主体による連携を具体的に進めるためには、そのための“仕掛け”を地域の中にどのように作るのが課題となる。

本研究では、この“仕掛け”のひとつとなりうるものとして“拠点施設”に注目する。

島松エリアには旧駅通所のような象徴的な施設はあるものの、地域内外の人々がいつでも気軽に集い、交流できる拠点となるような場所がない。仮にこのような拠点ができれば、それは人々の連携を促すだけでなく、地域がもつ豊かな空間や農産物、工芸品などのストレングスを結びつける場所になる可能性もある。そこで筆者らは、農福大連携に資するような“拠点施設”の先行事例を探したが、国内や道内では特筆すべき事例を見つけることができなかった。

しかし、この“拠点施設”づくりのヒントは、農福連携の先進国⁽⁶⁾として知られるオランダに見出すことができた。オランダはそもそも建築分野での先進国でもあることから、機能的な施設を設置することによって農福連携の効果を高め、さらにそれを地域の拠点として活用している事例が数多く見られる。これらの事例から成功要因を抽出することで、島松エリアでの実践に資する“拠点施設”のあり方を展望するための材料が得られると考えた。

III. 研究の方法

以上のような背景のもと、筆者らは2020年2月にオランダを訪問し、建物を生かした農福連携の事例（3ヶ所）や地域の拠点となる建物の運営事例（図書館2ヶ所、就労支援施設1ヶ所）を視察して関係者にヒアリングを行った。

その中でも農福連携の“拠点施設”として特に際立った成果を挙げていたのが、本稿で取り上げるホーフ＝ブルック福祉農園の施設であった。同農園は、身体的・精神的障害者、精神障害者、先天性脳障害者、自閉症児・者、認知症高齢者、適応障害者等のセラピー中心のケア施設であるが、新たに建てられた大きな“温室”に特徴がある。

この“温室”は利用者のセラピー目的だけ

でなく、農園や農作物の成長過程が身近に観察でき、収穫された作物や物販等の売店、テラスカフェの他に、訪問者のための大きなリビングルームの機能も含まれ、地域の人々に解放されており、地域住民にとっても憩いの場になっている。

そして、大変シンプルでありながら機能的でデザイン性にもすぐれた建築物であり、屋根には太陽光パネルも設置され、エコロジカルな視点で建築された。従来の典型的な障害児者施設や作業場ではなく、その建物が個々のデマンド (demand) に適した、軽く、透明性があり、誰もが気軽に訪れられるようなデザインを有することから、日本の福祉政策に示されるような「地域共生社会」のあり方や「拠点施設」の役割を探求するための手がかりとなりうる。

本稿執筆にかかるホーフ＝ブルック福祉農園での現地調査は2020年2月26日に実施した。当日は財団法人の理事を務める夫妻の案内により同福祉農園内の各施設を視察した後、夫妻に対して1時間30分程度のインタビューを実施した。現地調査の前には同福祉農園のホームページ⁽⁷⁾をはじめとする文献調査を実施した。

また、現地の視察に通訳同行してもらったデンマークのオーフス市にある建築設計事務所 CEBRA に勤務する建築家である矢崎一彦氏には、同福祉農園をもとに、農業地域における農福連携施設の建築的考察を行ってもらい、本稿の執筆にも加わってもらった。

IV. 調査の結果

1. ホーフ＝ブルック福祉農園の概要

ホーフ＝ブルック福祉農園は、オランダ王国ヘルダーラント州のビューレ自治体 (Buren, 2020年1月時点の人口2万6,742人⁽⁸⁾) 内にあるリーデ地区 (Lienden) に位置する。同福祉農園は農場主である De Kock 夫

妻によって運営されている。代表理事で妻の Annemieke 氏は児童福祉の専門家で、理事で夫の Ton 氏は園芸士を本業としている。事業目的は「農園での多様な作業を通じてゲスト (gasten, 利用者のこと) に対して社会参加や一般社会での就業に向けたトレーニングや教育の機会を提供すること」⁽⁹⁾である(写真1)。



写真1 ホーフ＝ブルック福祉農園の全体像
出典：ホーフ＝ブルック福祉農園のホームページより許可を得て転載。

夫妻は1996年に夫の父親から農場の経営を引き継いだ。農地が2.1haと狭隘なため農業だけで経営を成り立たせることが困難であったほか、妻が児童福祉に関連した事業を行いたいとの希望を持っていたことから、2006年に財団法人を設立して福祉農園へと転換した。なお、同福祉農園は2008年にはオランダ農業福祉連合会の福祉農園品質保証を取得している⁽¹⁰⁾。

同福祉農園には、高齢者福祉や乗馬、園芸、児童教育などを専門とする十数人の非常勤スタッフがおり、各事業の運営を支えている。また、年金受給者を主とするボランティア10人程度が農園の運営に協力している。さらに、ソーシャルワークやクリエイティブセラピー、教育学などを専攻する中等職業教育機関 (MBO: Middelbaar beroepsonderwijs, 16歳以上からの4年制) や高等職業教育機関 (HBO: Hoger beroepsonderwijs, 17歳以上からの4年制または6年制) の学生の実習先に

もなっており、毎年4人程度を受け入れている。

2017年の損益計算書によると、同福祉農園の年間事業収入は68万8,114ユーロであるが、そのうち60万ユーロを医療保険制度による福祉報酬が占めている。その他の収入は売店事業や貸しスペース事業などの収入であり、農業自体からの収入はほとんどない⁽¹¹⁾。医療保険制度に依拠した福祉施設として運営されていることは、同福祉農園の大きな特徴である。

2. ゲストの特性と活動

同福祉農園のゲストの年齢は8歳から80歳代まで幅広く、その特性も知的障害者、精神障害者、身体障害者、不登校児、認知症高齢者など多様である。同福祉農園は日曜日を除く毎日開園しており、ゲストの数は1日あたり25人程度、週を通じては100人程度にのぼる⁽¹²⁾。

同福祉農園では、農作業を中心にさまざまな福祉作業を提供することによってゲストのケアを行っている。農作業は、農場で野菜や果樹の世話をし、四季の豊かさを感じながら過ごすことで、肉体的な充足と精神的な安定を生むことがねらいである。また、高齢者に対しては孤立を防ぎ、農作業で頭と手足を使うことで健康寿命を伸ばすことも目的となる。

同福祉農園では動物の世話も重要な福祉作業である。畜舎ではウマやウシ、ブタ、ヤギ、ヒツジ、ウサギ、ニワトリなどが飼育されており、これらの動物との触れ合いも精神的な安定が目的となる。特に同福祉農園では乗馬の効果を重視しており、小学校と連携して、不登校児が学校に戻るためのプログラムにも活用している。

なお、ゲストは日々の福祉作業を2つのグループに分かれて実施している。グループを作る際には、グループ内に多様な特性を持つゲストが混在するようにする。これは、特性

の異なるゲスト同士がお互いを補い合って助け合い、共同作業の方法を学ぶことを目的としたものである。

また、2020年からは同福祉農園の半径20km圏内において、ゲストが庭の整備作業を行う事業も開始した。同福祉農園の外で作業を行うことで、ゲストが社会と接点をもつ機会を作ることがねらいである⁽¹³⁾。

3. “温室”とその機能

(1) “温室”の設置

同福祉農園は、多様なゲストの社会参加やトレーニング、教育の機会を広げるため、設立後から農園内の建物の増改築を行い、その機能を拡充させてきた。そのなかでも、2014年に“温室 (de kas)”と呼ばれるガラス張りの複合施設を新設したことは、同福祉農園の機能拡大に大きく寄与した。

“温室”は、ロッテルダム市に所在するKWSA建築エンジニア会社(KWSA Architecten Ingenieurs VOF)の建築家⁽¹⁴⁾によって設計された建物で、延床面積は200㎡(12.5m x 16m)である。総工費は約50万ユーロで、金融機関の融資(約30万ユーロ)と補助金(約20万ユーロ)によって資金調達を行った。

“温室”は、売店やキッチンなどの機能を有する建物をガラスの建物が覆う二重構造になっている。ガラス部分には合計4.8kWpの屋根材一体型太陽光モジュール(BIPV)が設置されているほか、内側の建物については建材に森林認証木材、壁は天然粘土が使用された土壁であるなど、環境とも調和した施設である(写真2, 写真3)。建物内部には売店やキッチン、テラスといった各部屋が連続的に配置されており、ケアが必要なゲストたちが利用しやすいように工夫された構造となっている。



写真2 “温室”の外観

出典：ホーフ=ブルック福祉農園のホームページより許可を得て転載。



写真3 “温室”の入口

出典：筆者（寺林）撮影。

(2) “温室”の各部屋が持つ機能

ここでは、“温室”を設置することによって、同福祉農園がどのような機能を獲得することになったのかを確認する。

1) 売店

“温室”の前面には26㎡(4m x 6.5m)の



写真4 “温室”内にある売店

出典：筆者（寺林）撮影。

売店がある(写真4)。この売店では、農園で生産された野菜や卵、シロップやジャムなどの加工品のほか、手作りの菓子などが販売されている。また、近隣地域で製造されたワインやリキュール、イタリアの福祉農園で製造されたオリーブオイルなど、地域や福祉に関連する特産品も販売されている。同福祉農園は、売店を設置することによって次のような機能を獲得することができた。

第一に、売店運営にかかわる福祉作業を提供する機能である。売店では、商品の販売や在庫管理など、多様な種類の仕事生まれる。これによってゲストに対して具体的な職業訓練の場を提供することができるようになった。

第二に、商品製造に関わる福祉作業を提供する機能である。売店では、ゲストが福祉作業の一環として作った加工品や菓子類が販売されている。また、焼印入りのプレゼントボックスの制作も、ゲストの福祉作業の一部である。ゲストはこれらの製造に携わることで、ものづくりの技術を習得することができるようになった。

第三に、同福祉農園と外部社会との接点を生み出す機能である。売店には、地域住民のみならず、近隣都市からも買い物客が訪れる。同福祉農園は全長16kmのバトゥエ散策路(Batouwepad)という散策路沿いにあり、散歩やサイクリングの途中に訪れる人も多い。売店があることによって、外部に対して同福祉農園の存在を知らしめるとともに、ゲストが社会と接する機会も生まれている。

2) キッチン

売店の奥に進むと、78㎡(12m x 6.5m)のキッチンのある部屋に行き着く(写真5)。ここは、ゲストが売店で販売する菓子やパン、テラスに提供する料理を作る場である。また、テーブルに置く花瓶のフラワーアレンジメントやドライフラワーを使ったカード作り、焼印入りプレゼントボックスの作成、描画、音

楽鑑賞など、多様な創作作業の場にもなっている。“温室”内の各部屋に接続しているため、障害のあるゲストでも安心して利用できる休憩室としても機能している。



写真5 “温室”内にあるキッチン
出典：筆者（寺林）撮影。

3) 菜園

キッチンのある部屋から建物を出ると、ガラスの内側にある菜園へとたどり着く（写真6）。“温室”内に菜園があるおかげで、ゲストは天候の悪い日や冬季でも農作業を行うことができる。また、ガラス越しには、農園全体、さらに農園に連続した周辺地域の農村風景を観察することができる。



写真6 “温室”内にある菜園
出典：筆者（矢崎）撮影。

4) テラス

キッチンから階段を上がると、78㎡（12m x 6.5m）のテラスがある（写真7）。このテラスは、ガラス越しに周囲の自然を感じなが



写真7 “温室”内にあるテラス
出典：ホーフ=ブルック福祉農園のホームページより許可を得て転載。

ら、会話や作業を楽しめる場所である。テラスにもキッチンがあり、喫茶や軽食を準備できる。このテラスは、次のような機能を提供する場となっている。

まず、テラスでは、定期的に一般客を対象とした「農家ランチ」というイベントを開催している。これはサンドイッチやスープなどのランチを提供し、食後のコーヒーや紅茶を楽しむイベントで、ゲストも料理やその提供を手伝うことで、一般の人々とのつながりを



写真8 “温室”のテラスに集まる人々
出典：ホーフ=ブルック福祉農園提供。

持つことができる。

また、テラスは一度に十数人が集まることのできる貸しスペースとしても運用されており、ビジネスの会議や地域のサークル活動など、幅広い目的で利用されている(写真8)。ここでもゲストは、喫茶や軽食の準備、ケータリングの手伝いを行う。

このように、テラスはゲストと社会との交流を生む役割を有している。すなわち、ゲストと地域社会との接点が“温室”のなかに備わっているということになる。

(3) “温室”の改良

“温室”は、ガラス張りのため、熱がこもりやすいという特徴があった。外気温が25°Cでも、“温室”の内部は40°Cになることもあった。そのため、“温室”が完成してから2年後の2016年には、真夏の日射対策として屋根ガラスに遮光のための金属メッシュを差し込み、日射を抑制する改良を行った。これによって日射量は84%も抑えられ、夏でもより快適に過ごせるようになった。また、冬の寒さ対策として、石油を燃料とする大型ラジエーターを設置した。

このように、“温室”では、一年を通して快適な室内環境を獲得するべく、完成後も少しずつ改良が進められてきた。

V. 考察

1. “温室”の社会的役割

前節では、同福祉農園の概要や活動内容、“温室”の構造と機能について紹介した。それを受けて、以下ではまず、この“温室”が担う社会的役割を整理する。

(1) 多様な特性を持つゲストを結びつける 拠点

“温室”が担う社会的役割の一つ目として、多様な特性を持つゲストを結びつける拠点と

なっていることが挙げられる。

そもそもオランダの福祉農園は、障害者に限らず、不登校児や認知症高齢者など、利用者の特性が多様であるところに特徴がある(Hassink et al. 2014)。ホーフ=ブルック福祉農園でも、身体的・精神的障害者、精神障害者、先天性脳障害者、自閉症児・者、認知症高齢者、適応障害者などのさまざまな特性を持つゲストを受け入れ、さらにそれらのゲストが一緒にグループとなって活動を行っている。

そのため、“温室”は、さまざまな特性を持つゲストが利用することを想定し、誰にとっても使いやすく、居心地の良い場所になるように設計されている。つまり“温室”はあらゆる人々にとっての居場所を作る役割を果たしているといえる。

(2) ゲストや福祉農園と社会を結びつける 拠点

次に、“温室”は、ゲストと社会、あるいはホーフ=ブルック福祉農園と社会を結びつける拠点になっていることである。

同福祉農園は、単にゲストに対して農作業の場を提供するだけではなく、社会参加や一般社会での就業に向けたトレーニングや教育の場を提供することを目標としている。同福祉農園では、“温室”に売店やテラスを設置することによって、外部から多くの人々が訪れるようになった。これによってゲストには、農園外部の人々とコミュニケーションをとる機会が生まれた。つまり、“温室”を拠点として外部社会との接点を積極的に構築することによって、社会参加や就業訓練の場としての役割をさらに高めることにつながった。

また、テラスでは定期的に近隣住民がランチを楽しんでいる。いわゆるサードプレイス(Oldenberg, 1989=2013)として、地域住民が気軽に集えるコミュニティの拠点になっているといえる。そして売店には、遠方からの

ハイキング客を含め、多くの人々が立ち寄れる場である。このように、外部社会に開かれた場になっていることで、同福祉農園は役割や必要性を社会に広く知らしめ、それによっていわゆる「地域共生社会」や「社会的包摂」の拠点として大きな役割を果たしているといえるだろう。

(3) 人々と「物」を結びつける拠点

加えて、“温室”は、人々とホーフ＝ブルック福祉農園に関係する「物」を結びつける拠点にもなっている。

“温室”にある売店は、第一に、野菜や福祉プログラムの中で作られるお菓子など、同福祉農園にある「物」とさまざまな人々を結びつけている。テラスで出される料理にも、農園で収穫される食材がふんだんに使われている。第二に、近隣農家が作ったワインやリキュールなど、地域社会にある「物」とさまざまな人々を結びつけている。第三に、イタリアの福祉農園で作られた製品のように、同じ志を持った遠方の人々の取組みを「物」を通じて地域の人々と結びつけている。

このように、“温室”は「物」を通じて、同福祉農園自体や地域社会が持つさまざまなストレンクス、あるいは同福祉農園が果たしている社会的役割の大きさを多くの人々に発信している。もちろん、人々と「物」を結びつけられるのは、上述のように“温室”にさまざまな人々を受け入れることのできる機能が備わっているためである。

2. “温室”の建築的特徴

以上のように、“温室”は、さまざまな要素を結びつける拠点としての役割を果たしている。これが可能になっているのは、“温室”が建築として次のような特徴を有していることによる。

(1) 風景に溶け込む建築の姿

ホーフ＝ブルック福祉農園の中核施設である“温室”の特徴として挙げられる一つ目の点は、その名前からも推測できるが、透明な外観による建物の軽快な姿である。それは従来の“施設”という建築タイプの印象からは大きくかけ離れたものである。特にオランダの農場におけるこのような施設は、古くからあるファームハウスをリノベーションしたものが多くみられ、レンガなどの古くからある素材で作られているので、どちらかというとい歴史的に意義があり、重厚な趣を醸し出している。

しかし同福祉農園の“温室”はそれとは異なり、その軽やかな佇まいによって、利用者が気軽に訪れられる雰囲気を作り出している。外から建物内の様子もうかがえるので、ストレスなく安心して建物の中に入っていくことは、セラピーケア中心の施設ということからも重要であると推測できる。

またガラス張りの外壁は、ある角度から見れば景色を反射するので、近隣の農園を映しこむ。周辺環境に溶け込んだその姿は、建物というよりは風景の一部のような存在として認識される。それは農園の緑豊かなランドスケープに広がる穏やかな雰囲気を纏った建物であるともいえるだろう。

(2) おおらかな空間

明快で一体感のある空間構成も特筆すべき点である。空っぽの“ガラスハウス”の中に細長い“箱”をおいた入れ子構造(図1)により、利用者にとって全体の建物構成が把握しやすくなっている。

各部屋の機能とその動線を見てみると(図2)、まず“箱”の端にある入り口から売店へ入り、奥に進むとキッチンがある。この二つの機能が“箱”を構成している。そこから“ガラスハウス”に出ると、そこは植物を育てる菜園スペースとなっている。キッチンの奥にある階段で2階に上がり“箱”の上に行くと、

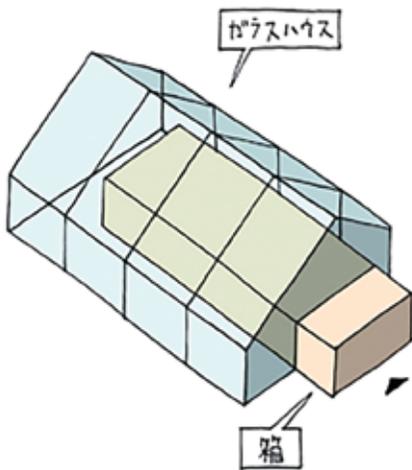


図1 “温室”の構成
出典：筆者（矢崎）作成。

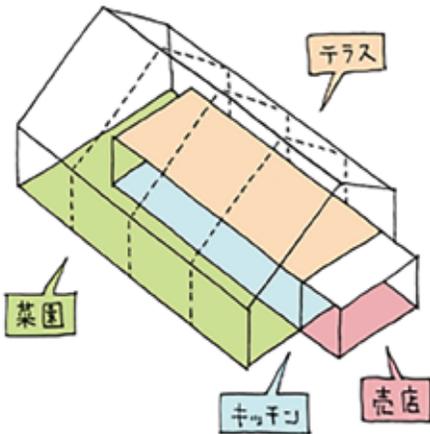


図2 “温室”のプログラム
出典：筆者（矢崎）作成。

テラスと呼ばれる多目的な活動が行われるスペースがある。“ガラスハウス”の中のテラスと1階にある菜園は空間的に連続しており、またキッチンと菜園は複数の大きなガラス戸で開放できるので、内部は全体的に大きな一室空間ととらえることができる。その一体感が感じられる開放的な空間構成により、ある部屋にいても他の場所の雰囲気が感じられ、全体の中で自分が今どこにいるかが認識しやすくなっているので、利用者も安心して時間を過ごせるだろう。

特にガラスに囲まれた、空間的にも視覚的

にも開放的なテラスは、なにか自発的に活動を起こしたくなるような感覚も持った場所である。それは周辺環境との密接な関係性、例えば日光、風、雨などの天候や季節の変化、時間の流れによって空間の表情が変わるので、その都度新たな発見のある、きっかけに満ちた空間であるといえるだろう。ある目的のためだけに作られた部屋ではなく、自然との関係性の中から利用者が思い思いの時間を過ごすことができる“おおらかな空間”は、それこそがすでにセラピーケアの効果の一部を担っているのではなかろうか。

(3) 箱とフレームの構成

そのおおらかな空間の実現は建物の構造によるところも多い。“ガラスハウス”では、木の柱と梁からなる山型フレームにより、内部には極力柱や壁が出てこない開放的な空間が可能となっている。また構造体を“現し”にすることで、フレームがそのまま室内の印象を決め、どこか力強く、守られているような安心感のある空間が表現されている(図3)。

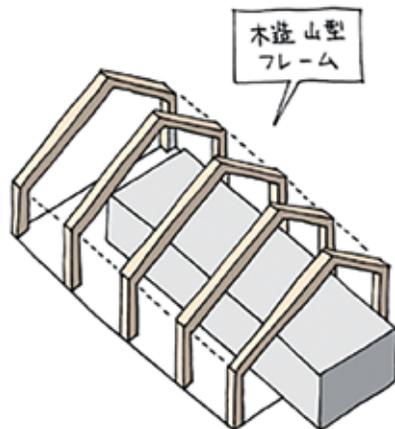


図3 “温室”の構造
出典：筆者（矢崎）作成。

(4) 使いながら作っていくシステム

そして現しの木造フレームにガラスを張るという明快でオープンな構成は、比較的容易

に設備や材料の付加や更新を可能としている。例えば、ガラス張りの建物は外部の熱環境の影響を受けやすいので、室内環境は夏はかなり暑くなり、冬はもちろん寒くなる。それに対しては、オーナー夫妻が実際に使いながら対応していったという。先述のとおり、完成して2年後の2016年には真夏の日射対策として屋根ガラスに遮光のための金属メッシュを差し込み、日射を80%以上カットすることに成功した。また冬の寒さ対策としてもラジエーターを設置し、一年を通して快適な室内環境を獲得していった。

竣工後が完成品として建物を使用していくという通常の方法は、生活する中で気づいた不具合や問題点を改善するのにかなりの労力と費用が必要である。しかし“温室”のようなオープンな構造、システムとすることで“使いながら作っていく”ということが実際に可能となっている。はじめから作り込みすぎず、必要最小限のものから始めていくという“軽装備”な空間の姿が先に述べた空間の開放感、おおらかさにつながっていると考えられる。そしてこのように気づいたことを対処しながら、加える、改善していくという姿勢は、そもそも変化しやすい自然環境を相手にしている農作業の“耕す”ことや、ケアにおけるスタッフと利用者がコミュニケーションを通じて関係性を“育む”といったことに通じているのではないか。そのような実際にこの場で行われている“活動の特性”と“空間の質”が密接に関連している場がここに実現されている。

(5) 建築的考察のまとめ

これらのことから理解できることは、前述の建築的特徴はすべてオーナー夫妻の理念が反映されているということである。セラピー中心のケアプログラムを実行しながら、利用者に自然に寄り添って穏やかな時間を過ごしてほしいというホーフ＝ブルック福祉農園の

哲学が、先に述べた風景の一部となるような建物の姿、開放的でおおらかな空間、使いながら作っていく柔軟なシステムという特徴によって明快に建築デザインに表現されている。それは利用者にとって、また我々のような見学者にとっても、体感的に伝わってくるだろう。つまり建築がただ空間を使うための機能というだけでなく、施設のヴィジョンを視覚化し、それを通して社会に接続していくための機能も持ちうることを、この“温室”は体現している。

VI. 結語

本稿では、北広島市島松エリアでの農福大連携とそれを核とした多様な主体の連携や地域活性化を進める“仕掛け”となる“拠点施設”の導入可能性について検討するため、ホーフ＝ブルック福祉農園の“温室”について考察を行った。

この結果、“温室”には、多様な特性を持つゲスト同士を結びつける拠点、ゲストや福祉農園を社会と結びつける拠点、人々と「物」を結びつける拠点としての役割があることがわかった。また、それを可能にしているのは、“温室”が風景に溶け込み、おおらかな空間を生むような建築構造を有し、さらに機能を果たしながら少しずつ改善することのできるオープンな構造であるという建築的特徴によるということもわかった。

以上のことから、“温室”は農福連携をコアとしつつ、多様な人々の連携を促進し、なおかつ地域にある「物」を中心にさまざまな資源を生かすことのできる“拠点施設”として機能しているといえるだろう。

実際にこのような“拠点施設”を島松エリアに設置することを検討する場合は、当然のことながら地域住民との合意形成や資金調達などのさまざまな課題があるだろう。しかし、農福大連携やそれをもとにした地域活性化を

どのように進めるかという議論を喚起する意味で、まずは関係者間で本稿の成果共有を進めることが重要だと思われる。また、すでに矢崎はホーフ=ブルック福祉農園の特徴を踏まえて、北海道に適した農福(大)連携の“拠点施設”である“ソーシャルグリーンハウス”の構想を進めている。島松エリアでの具体的な検討や“ソーシャルグリーンハウス”の具体案については、稿を改めて紹介することとしたい。

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、現地調査やその前後に行った質問回答など、ホーフ=ブルック福祉農園の De Kock 夫妻に多大な協力を得た。ここに改めて謝意を示す。

なお、本稿は2019年度北星学園大学共同研究費「札幌近郊エリアにおける農福大連携をコアとした地域活性化に関する研究」(研究代表者：岡田直人)による研究成果の一部である。

【注】

- (1) この建物は、現在も国指定史跡の旧島松駅通所として保存されており、島松エリアの象徴的施設となっている。
- (2) この節では、外部から訪れた人々がそれぞれの視点で意味づけ、価値づけを行えるという意味で、あえて「空間 (space)」という言葉を用いている。
- (3) こうした移住者らのグループは、島松エリアの魅力を発信するため、次のようなホームページを作成している。「北広島市島松沢 魅力的な人たちが集まる場所」(<https://shimamatsuzawa.wixsite.com/website>, 2020年10月27日閲覧)。
- (4) 竹内農園の詳細については、次のホームページを参照のこと。<http://takenouen.ohitashi.com/>, 2020年10月27日閲覧。
- (5) 厚生労働省「令和2年度 地域共生社会の実現に向けた市町村における包括的な支援体制の整備に関する全国担当者会議」(https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000114092_00001。

[html](http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000114092_00001.html), 2020年10月20日閲覧)。

- (6) オランダの福祉農園に関する団体の連合組織である農業福祉連合会 (federatie landbouwen zorg) によると、オランダ国内には2020年4月時点で842の福祉農園がある (<https://www.landbouwzorg.nl>, 2020年4月8日閲覧)。農業と福祉報酬の収入割合が各福祉農園によって異なるなど、その規模や運営形態は多様であるが、福祉農園のほとんどは、長期介護法 (Wlz) などによる国民保険制度の対象であり、国や利用者から福祉報酬を受けて運営されている (Hassink et al. 2014; 植田ほか2018)。
- (7) Stichting Zorgboerderij Hoog-Broek (<http://hoogbroek.nl>, 2020年4月8日閲覧)。
- (8) Buren: Municipality in Gelderland (<https://www.citypopulation.de/php/netherlands-admin.php?adm2id=0214>, 2020年4月8日閲覧)。
- (9) (7) に同じ。
- (10) この品質保証の認証では、医療機関品質法や労働条件法などの各種法律の条件に適合しているかどうかなどがチェック項目となる。詳細は注の (6) にある農業福祉連合会のホームページを参照のこと。
- (11) その他にも若干ながら慈善団体や会社、個人からの寄附金による収入もある。同福祉農園は税務局から一般公益団体 (ANBI: Algemeen Nut Beogende Instelling) の指定を受けており、同福祉農園への贈与等に対しては税制優遇が受けられる。
- (12) 土曜日の活動は、子どものアクティビティや大人のデイケアが中心となる。また、学校の長期休暇中には、特別活動も実施している。
- (13) <https://nederbetuwe.gemeentenieuwsonline.nl/nieuws/algemeen/103004/zorgboerderij-hoogbroek-in-lienden-gaat-tuinen-onderhouden>, 2020年5月31日閲覧。
- (14) 設計に携わった建築家は2人である。一人は、アーネム・ネイメーヘン応用科学大学 (HAN University of Applied Science) で教鞭も取る人物である。もう一人は、ロッテルダム応用科学大学 (Rotterdam University of Applied Sciences) で教鞭も取る人物である。

【引用・参考文献】

- Hassink, J., W. Hulsink and J. Grin (2014) “Farming with Care: The Evolution of Care Farming in the Netherlands,” *Wageningen*

Journal of Life Sciences, 68: 1-11.

- 石川悟・野原克仁・栗山隆・岡田直人・片岡徹
(2017)「地域に『あるモノ』を活用した地域活性化とアクティブ・ラーニングの試み」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』54: 173-189。
- 石川悟・岡田直人・栗山隆・野原克仁・片岡徹
(2018)「地域の活性化を導く地域に『あるモノ：物と者』の繋げ方」『北星学園大学文学部北星論集』55 (2): 85-100。
- 岡田直人・栗山隆・石川悟・片岡徹 (2016)「地方都市に『あるモノ』の社会資源化とネットワーク構築の試み」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』53: 179-194。
- Oldenburg, R. (1989) *The Great Good Place: Cafés, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Boston: Da Capo Press. (=2013, 忠平美幸訳『サード・プレイスーコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房。)
- 植田剛司・永井啓一・坂本清彦 (2018)『農福連携事業による「効果」の実証について』全労済協会公募研究シリーズ75。

〔執筆分担〕

- 寺林 暁良 IV, V-1, VI, 全体とりまとめ
矢崎 一彦 V-2
栗山 隆 III
石川 悟 II, III
岡田 直人 I, II

